

## 第8講 魅力ある授業をつくる

菊池真也（岐阜女子大学・特任教授）

### 【学習到達目標】

- ・魅力ある授業をつくる教師の指導力について説明できる。
- ・ガニエの9教授事象について具体例をあげて説明できる。

### 1. 魅力ある授業とは

教師の誰もが「子供にとって魅力ある授業をしたい。」と願っている。「魅力ある授業」とは、画一的な教え込みの教師主導型の授業ではなく、教師の工夫によって子供が教材や指導内容に引き付けられ、高まった学習意欲をもとに子供が主体的・協働的に追求する授業のことである。今後の教育の方向として重視されている「アクティブラーニング」（課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習方法）も、魅力ある授業を支える条件の一つとして大切であると考える。本章では、魅力ある授業をつくる上で大切なこととして、教師の指導力（児童生徒理解力、授業力、学級経営・生徒指導力）と、授業を行う上での教師の基礎・基本（教師が身に付けるべきスキル、子供に身に付けさせたいスキル、学習環境の整備）に視点を当てて述べる。

### 2. 教師の指導力

魅力ある授業をつくる上で、教師の指導力が基盤になることは言うまでもない。教師の指導力を支える3つの力として、第一に子供達一人一人がこれまでの学習をどれだけ理解しているか、興味関心やつまずきの傾向などを把握する児童生徒理解力がある。第二に授業力（教材を研究する力、授業を構成し展開する力、授業を分析する力など）がある。第三に、授業は学級集団で磨き高め合うという立場から、学級の良好な人間関係を築き上げる学級経営力がある。教師にとってはどれも大切な力であるが、本章では、魅力ある授業をつくるという立場から、授業力の「授業を構成し展開する力」に視点を当てて述べることとした。

### 3. ガニエの9教授事象

魅力ある授業をつくる上で、「授業を構成し展開する力」が重要であることは言うまでもない。学習についての理論と実際の教育実践の両面から授業構成を分析した結果、ガニエは9種類の教師の働きかけ（9教授事象）に分類できるという結論に至った。ここでは、ガニエの9教授事象を導入・展開・終末の中に位置付けて確かめる中で、魅力ある授業をどうつくるかについて考えてみたい。

表 8-1 ガニエの9教授事象

導入	1. 学習者の注意を喚起する →資料提示
	2. 学習目標を知らせる →「なぜ～だろう」
入	3. 前提条件を確認する →課題に対する予想
展開	4. 新しい事項を提示する →新たな資料の提示
	5. 学習の指針を与える →個人追求（机間指導）
	6. 練習の機会を設ける →全体交流「わかった」
開	7. フィードバックをする →発言へのコメント
終末	8. 学習の成果を評価する →キーワードまとめ
未	9. 保持と転移を高める →「自分の地域でも」

表8-1の矢印の右に書いてある内容は、ガニエの9教授事象に沿った社会科の授業の流れを示している。導入、展開、終末の順に、小学校6年生の歴史単元「聖武天皇と奈良の大仏」の授業を具体例として挙げながら、魅力ある授業のつくりかたについて述べる。

#### （1）子供を引き付ける導入の工夫

導入では、子供が授業や教材の世界へ入り込めば「1. 学習者の注意を喚起する」は成功である。この授業では、「奈良の大仏の実物大の手」と「人間の手形何個分かがわかる資料」を提示して子供を引き付けることができた。次に、学習目標を示し、この授業を通して何ができるようになるかを知らせる場（2. 学習の目標を知らせる）では、先ほどの資料の提示によって子供達から「聖武天皇はなぜこんなに大きな大仏をつくったのだろう」という疑問が出された。教師が学習課題を子供に与えるのではなく、子供の疑問を学習課題につなげていくことは、魅力ある授業をつくる上でとても重要

であり、子供の追求意欲を高め、主体的な学習態度を育成するのに有効であると考える。もう一つ導入すべきことは、すでに学習している知識やこれまでの経験を思い出して使える状態にする「3. 前提条件を確認する」である。この授業では、学習課題に対する自分の予想を考え、発表する場面で「地震などの災害で人々が不安を持っていた」「古墳時代のように自分の権力を示したかった」等の意見が出され、前時までの子供の知識や経験を確認することができた。

## **(2) 「わかった」が実感できる展開の工夫**

学習者が各自の記憶に新しい事項を組み込むには、導入で確かめた既習事項との違いや関連性を際立たせながら、「4. 新しい事項を提示する」ことが効果的である。この授業では、新たな資料として疫病や地震、乱などの年表と聖武天皇の詔の資料を提示した。また、新しい内容をただ示すだけでなく、その意味がわかるような助言を行う場（5. 学習の指針を与える）では、個人追求の際に机間指導を行い、子供の実態に即した助言を行った。次に、新しく学んだ事項を長期記憶にしまうため、子供達が知識や技能を使ってみる場（6. 練習の機会を設ける）では、自分の考えを仲間と交流する中で資料と資料とを結びつけ、仏教の力で社会の不安をしづめ国を治めようとした聖武天皇の願いを理解することができ、「わかった」という実感をもつことができた。そして、子供の取り組みの様子や発言に適切にコメントする（7. フィードバックをする）ことで徐々に理解を確実なものにしていくことができた。

## **(3) 学習の成果の定着を図る終末（まとめ）の工夫**

ガニエの9教授事象では、授業のまとめが「8. 学習の成果を評価する」「9. 保持と転移を高める」に相当する。「8. 学習の成果を評価する」を実施する上で大切なことは、今日はどんなことを学んだかを、導入で示した学習目標に立ち返って確認することである。教師がまとめて子供が教師の板書を写すことでは、子供の思考が働かず、学習の成果の定着を図ることはできない。例えば、「聖

武天皇」「不安」「仏教」などのキーワードを使って子供に学習してわかったことを自分なりにまとめさせる場を設定することで、学習の成果の定着を図ることも一つの方法である。「9. 保持と転移を高める」では、国分寺が置かれた所の地図を提示して聖武天皇の願いは自分達の地域にも及んでいたことを実感として理解することで、保持と転移を高めることができると考えられる。

このように、ガニエの9教授事象に沿って、社会科の具体的な事例をもとに述べてきたが、魅力ある授業をつくる上で、「授業を構成し展開する力」の重要性がより明確になるとともに、次の点が大切であることが分かった。

- I 子供を引き付ける導入の工夫（あれ、なぜだろう）
  - 2. 学習目標を知らせる→子供の疑問を課題につなげる
- II 「わかった」が実感できる展開の工夫（そうか、わかった）
  - 6. 練習の機会を設ける→自分の考えを仲間と交流して深める
- III 学習の成果の定着を図る終末の工夫（こうやればできるんだ）
  - 8. 学習の成果を評価する→キーワードを使ってまとめる

#### 4. 教師が身に付けるべきスキル

これまで、魅力ある授業をつくる上で、ガニエの9教授事象に沿って「授業を構成し展開する力」の重要性について述べてきた。これからは、魅力ある授業の前提条件となる教師の基礎・基本について、教師が身に付けるべきスキル、子供に身に付けさせたいスキル、学習環境の整備について述べる。

## (1) 発問・指示・説明

授業で教師は子供達と様々な関わりをする。代表的なものが発問、指示、説明である。この3つの違いが曖昧だと子供達は何をしてよいかわからず迷ってしまう。

発問とは、子供達の知識を確かめたり、思考を促したりするための問い合わせである。問い合わせることで自分の頭で考えるきっかけが生まれる。発問には「トマトはくだものですか？」のように一問一答で答える閉じた発問と、「くだものと野菜の違いは何だろうか？」のように、様々な答えが考えられる開いた発問がある。閉じた発問はピンポンのようにさっと投げかけ、まっすぐ打ち返してこられるか（正解かどうか）確かめる。開いた発問では、バレーボールのように子供達が投げかけられた球を回す（考えを練り合う）ところをサポートする。優れた発問とは、一つ問うと次から次へと考えが飛び出し、広がっていく中からその時間の本質的な学習内容が見えてくるものである。導入はピンポンのように軽快に、展開ではバレーボール型でじっくり練り合う。最も核になる発問を中心発問と呼ぶ。

指示とは、「～をノートに書きなさい。」「～を声に出して言いましょう。」のように教師から子供にしてほしい行動を伝えることである。指示を明確にしないと、子供達は何をしてよいのか分からなくなる。「どこに」「何を」書くのか、「いつ」までに作業を終えるのか、「どのように」まとめるのか。5W1Hが明確な指示を心がけることが大切である。

説明とは、教師が学習内容を子供によく分かるように伝えることである。知識や技能、考え方を言葉だけでなく、必要に応じて板書や図表、資料などを組み合わせて伝える。教師は、子供達が学習目標に到達するために何を説明し、何を考えさせたり練習させたりするべきかの見極めが重要である。

発問、指示、説明を使い分けるバランスは学習内容による。言語情報や運動技能を身に付けさせる授業では明快な説明と指示、閉じた発問による確認が中心である。知的技能や認知的方略、態度のように頭と心を動かせてじっくり取り組む授業では、考える土台を要領よく説明し、吟味された開いた発問にじっくりと向き合わせ、自分の考えをまとめるための指示を明確に行うことが大切である。

## (2) 全体への目配りと個への心配り

教師は、常に児童生徒の姿（目）を見て、その反応を感じて話している。前3列ぐらい見ていただけでは後ろの子供の様子に気付かない。後ろの方だけでは目の前の子供の様子を見落としてしまう。従って、学級全体に目を配りながら、個々の子供の表情や言動などから学習内容をどれだけ理解しているのかを把握することが重要である。大事なことは、「どこを見るか」ではなく、「誰を見るか」「何を見るか」である。「これはこの子とこの子にしっかり押さえさせなくては」「この発問ならこの子達はこんなことを言うだろう」「この辺での子は飽きてしまうかな」と、子供の姿を思い浮かべて授業設計をすると、自然と多くの子供達に目を向けることができる。教室での目線は、教材研究の段階からすでに始まっているといえる。また、教師が笑顔と共に感的な態度で接することは、子供に自分の存在を受け止めてもらっているという安心感や思い切って発言しようという意欲や自信にもつながる。

## (3) 板書計画

教科書の内容をまとめて体系的に示す以外にも、子供の意見を整理したり、課題分析のように授業内容を構造的に示すなど、板書には様々な役割がある。教材研究の結果が板書にあらわれると言われるほど、板書は学習内容が的確に子供にとっていかに分かり易く整理して示すことができるかが重要である。そのため、事前にイメージ（板書

計画) を練る際には、実際の子供達をイメージし、この発問にどんな反応が返ってくるか、子供の意見をどこで整理し、授業のまとめはどこに書くか。板書を考えることで授業の流れや提示したい資料がイメージできる。そのようなイメージをもってから授業に臨み、子供の反応を生かしながら少しずつ修正を加え、子供達が主体的に追求した過程が分かる板書に心がけたい。

#### (4) 机間指導

授業中に子供達の座席を巡ることを机間指導という。机間指導の主な目的には次の4点があげられる。

- ①子供の理解度を探る
- ②発表させる前に子供の様々な考えをつかむ→話し合いの組織化
- ③花丸をしたりして自分の考えに自信をもたせる
- ④支援が必要な子供達に補助指導を行う

机列表にメモをしたり、「この子に発表をさせて自信につなげよう。」「大きく3つの考えに分かれているな。」「思ったより理解ができるかもしれないな。後で補充問題を出そう。」などと考えながら机間指導を行い、設計した授業を子供の様子を見ながらその場で確認や修正していくことが大切である。

#### (5) 子供への言葉かけ

子供の発言や学習活動に対して教師が行う言葉かけは、子供が自分の行動の意味や価値を受け止める上で、大きな影響を与える。ガニエの9教授事象で言うところの「7. フィードバックをする」である。まず、「ほめ上手になること」、「すばらしい」「すごい」など心の底から子供達をほめることで意欲が湧いてくる。次に、具体的にどこがよいのかをほめる。発言の中身がよい場合は「資料や自分の経験をもとに話すことができたね。」とほめる(価値付ける)ことで、その教科の学び方が分かり、他の子供の姿にも広がっていくことが期待で

きる。その他に、「大きな声でみんなに伝わるように話してくれたね。」「自分の考えをしっかり書けたね。」など、態度や学び方、クラスのルールにつながるところをほめることもできる。教室は子供達が様々な失敗を繰り返しながら学習していく場なので、お互いが失敗をしても認め合える人間関係を築けるようにほめたり励ましたりする教師の言葉がけが重要である。

## 5. 子供に身に付けさせたいスキル

### (1) 聴く

すばらしい話を聞いて、感動する人と感動しない人がいるのはどうしてだろう。それは、その話から何かを学び取ろう、自分に生かそうという気持ちで聞いているか否かの違いではないだろうか。人間の成長にとって「人の話に真剣に耳を傾ける」「心を働かせて聞く」ことは、とても重要なことである。「学習の基本は聞くことにある」と言われるが、「いい姿勢をしなさい」と何度も唱えても、その場だけのいい姿勢に終わってしまうので、子供が「聞く姿勢って大事なんだな。」「仲間を大切にした聞き方をしなきゃ」と体感する指導をすることが大切である。次は、N小学校の「聞く指導」の具体事例である。

表8－2 聽く力を身に付ける具体的指導事例

- ①ピラミッドの目（全員の目がそろうのを待つ）  
「聞きなさい」でなく、子供が自ら聞こうとする姿を待つ。
- ②赤ちゃん、手なぶりマンをしない。（まず、手の指導から）  
口の中に手を入れる子や手なぶりをしている子をなくす。
- ③しかの耳（どんな小さな声でも聞こえる耳）  
「しかしは1km離れた所からでも聞き取れる耳を持っている。」
- ④同じことでも言える  
同じ考え方でも自分の言葉で話す(少し違う考え方があることがある)
- ⑤「大事なことは何か」聞き取る

「Aさんの大事なことは何か」を尋ねて発言の要旨を聞き取る

⑥違いにこだわった聞き方（比べながら聞く）

「AさんとBさんの違いは何か」→「違い」が話し合いの出発点

⑦全校の合い言葉「せめあてかつ」

せ・・・背筋を伸ばして め・・目を見て あ・・足を床に付けて

て・・手はひざの上 か・・考えながら つ・・続けて

低学年では、話し手の目を見て聴くことに重点を置き、高学年になるにつれて「聞く（形で聞く）→聴く（中身で聴く）」への質的な向上を図り、相手が何を伝えようとしているか心を働かせて聴く力を育てることが大切である。また、4月の学級開きで初めて教師が子供の前に立つ時を大切にしたい。「こちらを向きなさい」と指示をするのではなく、全員の目がそろうのを待つのである。つまり、「聞きなさい。」というだけでなく、子供自ら聞こうとするのを待つのである。全員の目がそろった時、「何も言わないのに自分から先生を見ることができたね。言われてではなく、人の話を進んで聞こうとする、その心がすばらしいよ」と価値付けることで「聞くこと」の大切さを強く意識づける。このことの繰り返しで教師のこだわりが子供に伝わり、自然と子供達の視線が集中するようになる。

## （2）話す

話す力の高まりは、「聴く力」の高まりによって生まれる。発言する力をつけ、発表内容を豊かにするためには、まず聴く姿勢づくり（聞く→聴く）から始めることが大切である。次は、N小学校の「話す力」を身に付けるための具体的指導事例である。

表8－3 「話す力」を身に付ける具体的指導事例

①話す訓練の場の設定（お・は・こタイム）

朝の会の時間に話す訓練の場を設定し、大きな声ではっきりと心をこめて話す活動(絵を見てお話)を継続する中で話す力を伸長する。

②話し方ステップを子供と共につくる

ステップ1 自分の考えがもてる。ぴしっと手をあげる。

ステップ2 大きな声ではっきりと話す。

ステップ3 わかりやすい発表をする。

(～です。そのわけは～。：結論を先に理由を後に話す)

(～と違って～です。：友達の考えとのつながりを明確にして話す)

(一つ目は～二つ目は～：大事なことを短くまとめて話す)

いつも自分の考えと比べながら聞き、友達の考えを聴いた証拠として「同じ、違う」で反応することを繰り返す中で、話す力を伸長することができる。また、どんな話し方がよいのかを知らない子供達に、よい話し方をした子供の発言を価値付けることで、その話し方を広めしていくことができる。そして、話し方ステップを子供と共につくり、全員の子がステップ1の内容ができるようになったら、学級の宝物として位置付けることもできる。このような方法を通して、様々な場面で子供達を鍛え、毎時間の積み重ねが確かな力となっていくのである。

### （3）話し合う

話し合いは、単なる意見の交流に終わらず、友達の考えを聞いて自分の考えを高めたり、自分の生き方に生かしていくことが大切である。つまり、「伝えようとする心」と「学びとろうとする心」の双方向の心の響き合いを通して自分の高まりや友達と共に学び合うことの喜びを実感することである。N小学校では、話し手と聞き手の一体感の上にみんなでつないで深めていくために「お話しチームワーク」を全校的に実践している。次は、話し合う力を身に付けるための具体的指導事

例である。

表8－4 「話し合う力」を身に付ける具体的指導事例

①お話しチームワークの合い言葉を決めてみんなでつないで深める。

ち・・違って～です。 (考え方が違う、わけが違う)  
い・・入れて話す。 (聞いて分かりました。 变わりました。 )  
む・・向かって話す。 (語りかけながら～ですね。 )  
わ・・分かり易く話す。 (前へ出てきて、動きを入れて)  
あ・・合わせて話す。 (AさんとBさんの考え方を合わせて)  
く・・比べて話す。 (前の学習や友達の考え方と比べて)

②子供が常に「なるほど、でも」の聴き方をして反応する。

友達の考え方を自分の考え方と同じか違うかで聞き、「同じ」「少し違う」「違う」「でも」等で反応する。

## 6. 学習環境を整える

「環境は人をつくる」と言われるように、教室環境は子供の人格形成に重要な役割を果たす。教師からの働きかけは授業以外にも教室の中に埋め込むことができる。次は教室を学習環境として工夫する方法を紹介する。

### (1) 掲示物を工夫する

廊下や教室の背面や側面には、子供達の学習成果が見えるものを掲示したいものである。教科の学び方のよさが分かるノートをクリアファイル等に入れて掲示し、学び方のどこが素晴らしいのかが子供達に伝わるようにコメントを入れることもよいことである。様々な教科の学び方のよさを紹介することで子供の見る目を広げたり、学習の仕方を広めたりすることができる。また、話し方や聞き方、教科の学び方

のステップ表を子供と共につくり上げて掲示し、子供のよさをそのステップ表と関連づけながら位置付け、価値付けをして子供の力を高めていくことができる。

## (2) 授業に活かす学習環境の工夫

本章の「魅力ある授業をつくる」という立場からも、学習環境は重要な役割を果たす。たとえば、子供達の主体的な追求を支える学習環境の工夫として、前時までに学習した資料や子供達から出た意見をまとめた資料を掲示しておくことで、子供が既習内容を生かして発言をし、追求を深めることができる。また、学級の図書コーナーに教科の単元と関連する本を置いておくと、新しい単元に入る「伏線」として活用でき、教師の発問に「あの本にのっていたよ。」と紹介する子供が出てくると、授業の幅も広がり、子供の主体性が促されると考える。

### 【ワークショップ】

ガニエの9教授事象をもとに、魅力ある授業をつくるのにどんな授業展開をするとよいのかを具体的な教科名や単元名をあげながら、グループで話し合って発表しなさい。